

Title	山口正太郎著 純理経済学の諸問題
Sub Title	
Author	中山, 英一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.11 (1921. 11) ,p.1550(138)- 1552(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211101-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

質を改たならざるを避くることが出来やう。殊に日本では最初皇室の権力が能く行はれて居つたので先づ戦田制度を採用したのに露國では後に帝權が確立したので莊園制度が戦田制度に先づ行はれて居つたのであると考へて見たならば一層比較研究が興味多きものになるであらう。

そは兎に角今日は『西洋事情』を以て満足す可き時代では無い。露國の革命を殊に經濟史上から理解せんと欲する讀者は須らく本書に就て學ぶ可きである。而もなほ一層深く研究せんとする篇志があるならば前に授いたクリュチエフスキイの英譯并にキャナダのトロント大學の經濟學教授 James Mavor の世界大戦前に公にした *Economic History of Russia* を繙くがよい。何れも本書の主要な參考書である。なほ序に一言して置くが文學士堀竹雄氏が昨年以來『史學雜誌』に寄稿して居るクリュチエフスキイのロシア國史講義邦譯は英譯よりもズット詳しものである。(田中萃一郎)

山口正太郎著 純理經濟學の諸問題

山口正太郎氏著『純理經濟學の諸問題』を讀む。收むる諸論文十篇は著者が『一昨年の春、靜な洛北の學府、同志社大學法學部の教壇に立つて以來の思索の跡で主として獨逸の純理經濟學の研究で』あり、著者の將來に對する準備行為に他ならないと言ふ。吾等は先著者の經濟學に對する態度を知る爲に煩雜を厭はず序文を引用する。『純理經濟學が一科の獨立せる學問たる以上、其存在の權利を主張するが爲には之等の不純分子を排除し淨化せなければならぬ、それには一を擇んで經濟學の對象とし他を然らずとして捨つる標準たる基礎概念を要する、從來の閉されたる經濟學の内容を形成せるものは既に經濟學の概念として論せられてゐる限り一を採り一を捨つる撰擇原理たり得ない、茲に於て閉されたる經濟學の皮殻を破つて更に一段の高處に立て經濟學の基礎概念を求め經濟學の他の科學と伍して占むべき科學上の地位を闡明せなけ

ればならない。アンリ、ポアンカレが認識論の立場に於て自己專攻の數學物理學の價値を明かにした如く、純理經濟學の認識論的批判は經濟學當面の重要問題の一言はなければならぬ』と。即ち氏は近頃の一新傾向である經濟學を哲學的に研究し考察しやうとする一人である事を知り得る。

研究論文十篇中卷頭を飾る雄篇『シユタムラ』の唯物史觀論の一考察、『シユテフィンガー』の經濟哲學の解説』その他五篇は孰れも有名なる學者の學說研究、批判、又は解説である。之等の諸篇から吾等は、篤學なる著者の風貌、哲學と經濟學の交渉、或は學說の大要等を知り得るが、吾等は寧ろ直接に所謂認識論的批判の見地から、經濟學を樹立せむと努力する著者が、現代の經濟組織を如何に觀察してゐるか、經濟學の基礎概念を何處に求めてゐるかを知り度いと思ふ。吾等の此要求に應じて呉れる論文は『經濟生活の意義』と題する一篇である。著者は經濟學の基礎概念並に經濟生活に關する諸研究を

検討し乍ら自説を展開して行く事稍々難解ではあるが頗る巧妙である。吾々は出来る限り誤りのない様に注意して結論に近い部分を抄説する。曰く、世が進歩して貨幣經濟時代となると企業と家政が分離して、餘剰收益の出来るだけ多きを得んとして、企業に熱中する、この企業に熱中する事は所謂營利で、資本主義の世では此營利衝動が度を増て行く。普通經濟學は此營利と生産とを分ち兩者共に經濟學の研究對象として其研究範圍に置いてゐるが、生産少くとも生産行為は假令所謂經濟主義に依て指導せられるにしても其は全く技術に外ならぬから研究範圍外だと思ふ。又消費は畢竟受感享樂の度に關する心理問題であつて之は實驗心理學に讓て、經濟學に於て論ずるには及ばないのである。斯くて經濟學の純對象物となり得るものは營利である。經濟とは要するに、資本主義の永續する限り營利を意味するものであつて、經濟行為は營利行為以外にはない。従て經濟學は營利を中心として論述すべきである。『從來の經濟學の研究

し來りたる資本、土地、勞働は營利に關する限り之を拾集包括して研究對象とすべきである』然らば著者の言ふ營利とは何ぞや。現時の生産は將來の販賣を豫想して行ふものであり、且つ費したる費用を償ふて其上而して事情の許す限り、出來るだけ多くの収益を得る事を目的とするのであつて、此費用を償ふて其出來るだけの収益を得んとするのが營利の本質である。而して經濟生活の歸趣に就ては、經濟生活は自己目的を有する生活ではなく、他の更に高次の文化生活への手段であつて、此最高生活に何等かの寄與をなし得る處に經濟生活の眞の意義があらねばならぬと説明してゐる。

即ち著者は從來の經濟學四分法に不満足である事明白である。そして慾望を基礎概念とする經濟學をとりざるは勿論、貨幣を中心概念とする提唱をも排し、營利を中心概念とすべしと主張してゐるのである。現代の經濟が營利經濟である事に異存はない。吾等は勿論著者と同樣營利を離れた經濟生活はあり得ないと斷言する。

然しそれ故經濟學の對象を、基礎概念を營利に置くべしとなす主張に對しては直ちに賛同出來ない。又その説明も余りに簡單の爲か、或は所謂認識論的批判の見地よりする考察が充分でない爲か、明確に論理づけられてゐない様に思ふ。吾等の如く哲學の素養なき者にとつては、かゝる部分に對する著者の創見——即ち營利の如何にして經濟學の認識目的を内容的に制約し得るか——を教授していただきたいのである。

然しかうした部分的不満足はあつたが、全體として面白く且つ有益に讀了した。純理經濟學に對する研究が稍々等閑視せらるゝ傾向の見ゆる近頃、斯の如き書を得た事は慶賀に堪えない。それ故經濟學徒ならざる評者の如きまでその微才を忘れて妄評を試みた次第である。私は、自ら年若きと稱する著者の大成を期して待つ一人である。(中山英一)

雜報

理財學會々報

理財學會秋季大會 九月二十二日午後零時半より大ホールに於て開催す。満場立錐の餘地なく、前同に優る盛況を呈したり。幹事の開會の辭に次ぎ左記諸氏の講演ありたり。

- 一、民衆娛樂問題の經濟生活的基礎 權田保之助氏
- 一、税制整理の若干基本問題に就いて 神戸正雄氏
- 一、アダム・スミス論 高橋誠一郎氏

一、唯心的經濟史觀 賀川豊彦氏
午後五時半盛會裡に閉會 次いで萬來舎に於て賀川氏を主賓として晚餐會を開く、一同食卓を圍みて歡談を交へ八時散會す。晚餐會出席者左の如し。

- 賀川豊彦氏、小城基氏
 - 堀江、野村、加田、園、金原諸教授
 - 三年幹事 小栗、津田、吉岡
 - 二年幹事 稻上、黒川、中島、小堀、柳、岩崎
 - 一年幹事 竹中、山田、一柳、樫森
- 尙ほ今回西本辰之助教授より金五十圓を理財學會へ寄附せられたり。